

出羽三山の植生

出羽三山には、きわめて多様な植生が見られます。月山 (1,984 m) のふもとには、樹齢 200～300 年のブナの樹々があります。これらの樹々の広い林冠が森を覆っており、他の背の高い植物種の生存を困難なものにしています。標高が上がると、風景は劇的に変わり、高山の植生が繁茂しています。そこでは、月山の強い風が、より背の高い植物種の成長を妨げているのです。

羽黒山 (414 m) のスギの森は樹齢 300～500 年ほどですが、「爺杉」という注目すべき例外があります。爺杉は、樹齢約 1,000 年と推定されています。これらの樹々のほとんどは、羽黒山の寺院の僧たちの指示のもと、三世代にわたって植えられたものです。これらの樹々は、地面をより安定させ、地すべりを防ぎ、ひいては巡礼をより行いやすくするために植えられました。

ここでは、自然と精神性が強く結びついています。この地域の植生は、修験道の信者たちによって、様々な方法で利用されてきました。修験道とは、山で修行に努める古くからの伝統であり、仏教と神道両方の要素を含んでいます。歴史を見ると、修験道の信者たちは自給自足で暮らし、この山で育った植物のみを食料と薬にしていました。信者たちは、植物の利用がこの山の力を使う助けになる、と考えていました。信者たちは、植物自体を検証し、試行錯誤によって得た知識を世代から世代へと受け継いでいきました。周辺の村に住む人々は、二日酔いから関節炎まで、幅広い病に対する自然療法について、修験道の行者の経験を信頼していました。ウワバミソウ (学名: *Elatostema umbellatum* var. *majus*) は、葉の多い多年生植物であり、虫刺されや切り傷の手当てに使われていました。キバナイカリソウ (学名: *Epimedium grandiflorum* subsp. *Koreanum*) は、黄色の花を咲かせる植物であり、回復のための強壮剤や関節炎の治療に使われていました。コシアブラ (学名: *Chengiopanax sciadophylloides*) は、日本原産の落葉樹であり、血圧を下げるために使われていました。ヤマブドウ (学名: *Vitis coignetiae*) はアジア原産の野生のブドウであり、肌のしみの治療に使われていました。